

演題 1

乳歯歯冠幅径と歯間空隙量の関係に関する研究

○進士久明、小嶺隆一、石田万喜子

本川 渉

福歯大・小児歯

乳歯列にみられる特徴の一つとして生理的空隙、すなわち発育空隙や霊長空隙がある。これらの歯間空隙は後継永久歯の排列に良好な影響を与えると考えられているが、空隙の存在は永久歯が正常に排列するための完全な保障とはなり得ない。

本研究では、乳歯列上の歯間空隙量と乳歯の歯冠近遠心幅径との関係を知ることを目的として、石膏模型を用い調査を行った。

【資料および方法】

資料には福岡市早良区の幼稚園児及び本学附属病院小児歯科外来を訪れた小児で、1985年から1988年の3年間に出生した小児から得られた乳歯列石膏模型のうち Hellman の Dental age II A 期の男児103名、女児82名、計185名の模型を用いた。

乳歯列上の歯冠空隙量の総和によって、空隙の存在しない群、0～1mm群、1～2mm群、2～3mm群、3～4mm群、4mm以上の群に分け、各群の乳歯歯冠幅径を求めた。

【結果】

- 1) 乳歯列上の歯間空隙量総和の増加にともなって、乳歯の歯冠近遠心幅径は小さくなる傾向が認められた。
- 2) 乳歯の歯冠近遠心幅径は、男児の方が女児より大きい傾向を示した。
- 3) 乳歯の歯冠近遠心幅径に、左右差は認められなかった。

演題 2

頂窩に関する研究(第2報)ーヒト未萌出第1大臼歯における頂窩のSEMによる観察ー

後藤讓治、○張 野、細矢由美子

長大・歯・小児歯

目的：我々は歯牙の咬頭部付近に存在する頂窩について、走査型電子顕微鏡による観察を行い、小児歯科学雑誌第28巻第2号に発表した。しかしながら、咬頭部が咀嚼による咬耗、摩耗を蒙っていない未萌出歯牙の頂窩に関する報告はこれまでになされていない。今回は未萌出第1大臼歯を用い、頂窩の発現状況について、走査型電子顕微鏡による観察と頂窩の発現の個体別、左右別の比較検討等を行った。その結果を第2報として報告する。

材料並びに方法：観察に用いられた試料はインド人小児の乾燥頭蓋骨10顆の下顎骨より得られた未萌出左右側第1大臼歯20歯である。これら被検歯の歯冠の形成はほぼ完了していたが、歯根の形成はみられず、下顎骨中に埋伏している状態であった。観察試料の作製方法は、まず、下顎左右側第1大臼歯歯胚を覆う歯槽骨を除去し、歯胚を取り出した。被検歯を10%次亜塩素酸ナトリウム溶液中に15分間浸漬し、次いで、1.5%過酸化水素水に5分間浸漬した。さらに、水道水で2分間水洗後、蒸留水中で5分間超音波洗浄を行った。アルコール系列で歯牙の脱水を行い、乾燥後、接着剤で試料台に装着し、イオンスパッタリング装置で金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡で観察を行った。観察は加速電圧20KVにて、20倍～1,000倍の範囲で行った。

結果：未萌出第1大臼歯の頂窩は、下顎骨10症例中9症例(90%)に、また、被検歯20歯中14歯(70%)に総計98個(右側第1大臼歯51個、左側第1大臼歯47個)認められた。頂窩の発現部位は、頬側咬頭部において高頻度に観察された。頂窩の開口部の内径は、右側第1大臼歯では最大180 μ m、最小9 μ m、平均47.7 μ mであり、左側第1大臼歯では最大150 μ m、最小9 μ m、平均37.6 μ mで、左右側第1大臼歯間に有意差は見られなかった。頂窩の開口部の形態は、円形のもの52個(53.1%)と最も多く見られた。頂窩は同一個体の左右同名歯に発現する傾向が見られた。